

思い出すこと

田中文雅

「清心館」に入る。文学部事務室の掲示を横目に階段で二階に、地理研究室を通り抜けると日本文学共同研究室の扉が左手にあった。ドアを細目に開け中の様子を窺うと、右前方の助手席から「なんやー」の低い声が、上向き加減の視線とともに私達を見舞ったものであった。

不勉強でいつもレポート、発表の締切りギリギリに、何か安易に課題をこなす虎の巻はないかと、敷居の高い思いで研究室を訪れる私達不真面目な学生にとって、肝を冷す一瞬である。

森本修先生で私がいつも思い浮かべるのは、日本文学研究室の奥で盧山寺の杜の木漏れ日を浴びた先生のシルエットと、眼鏡の奥の鋭い眼差しと、あの声である。

私達が敬遠した研究室のあの席で先生は、多忙を極める公務の傍ら、そのライフワークである芥川龍之介研究に心血をそいでおられたのである。院生になった一年目、森本修著『芥川龍之介伝記論考』の刊行を祝う会があり、何故だか私もその席に出ていた。会の内容など何一つ記憶していないが、ただ関大谷沢永一氏の敵しい中にも友情あふれるスピーチと、それを神妙な面持ちで聞いておられた森本先生の姿をおぼろげに思い浮かべることがで

きる。会の帰途「伝記研究は文学研究たり得るか」などと、嘴の黄色い議論をした記憶もあるが、研究者として森本先生を意識した最初であった。

当時の森本先生は、晩年の姿からは想像ができないほど、長身でガッシリした重厚な体つきをされており、御所で時折行われるソフトボールなどでは、先頭を切って走り回っておられた。

大学院修了後、一年余、急に日本文学助手として、あの「木漏れ日」の席に小生自身が座ることになった。終局を迎えつつあったとはいえ、全国的な学園紛争の渦中であり、往時に較べると二倍以上にふくれ上った学生をかかえる日本文学専攻は、手をつければつけるほど仕事の山が待ちかまえていた。人間個人の能力をはるかに越える処理を必要とする仕事がそこにはあった。専攻の教務関係、行事の立案、運営、日本文学会の諸事務、加えて連日のように行われる学生との集団団交等に備えての学生の意見、動向の把握など、事務処理能力も、才能もない小生には、とてもこなせるとは思えなかった。事実、前任者の森本先生の影に、日向ひなたに立ったバックアップなくして四年余に渉る助手の仕事が続けられたとは思えないのである。

のことばかりであった。

国崎先生の計報が入った時、私は迷わず森本先生に電話した。葬儀の日程や、私がお手伝いすることなど指示してもらいたかったからである。しかし電話に出られた先生は、弱弱しい声で今病床にいたこと、とても葬儀に出られる状態でないことなどを話された。先生自身の健康状態がきわめて悪いことを実感させられた。

国崎先生を偲ぶ会が開かれ、久しぶりで会う同窓生の中に、小康状態を得られた森本先生の姿があった。「ブンガ久し振り」と言って近づいてこられる先生の声はまぎれもなく、学生時代一度ならず肝を冷したあの「なんやー」という声そのものであった。

例によって最近の自分の病状を話された後、話題が天折した田中健二の事に及んだ。私が「忙しきにかまけて墓参りもしていないのですよ」と言うと、「お参りする時は必ず誘ってほしい」と念をおされた。そしてそれが先生との最後の別れになってしまった。

森本先生、健の墓参りに一しょに行こうと約束したじやないですか。それなのに自分一人で直接会いに行ってしまうなんて。

きつと今ごろ、あの世で国崎先生を囲んで、建部先生、本田先生、鷹津先生、そして先生のお気に入りだった田中健二を相手に杯を重ねておられるのでしょうかね。銚子の酒の残りを気にしながら……。

(たなか・ふみまさ 就実女子大学教授)

この心身ともにすり減らす助手の仕事を、森本先生は十五年以上も続けられていたのである。冷静、沈着、几帳面で、物事を自分流に処理しないと気のすまない先生にとって、この間の心労は想像を絶するものであった。そして、この時の影を、森本先生は、その後も永く引きずっておられたように思えてならない。

泥酔して演じられる先生の奇行に、事の善悪だけでは判断できない先生の裸の叫びを聞いていたのは、私だけではあるまいと思う。深夜の寺町通りや河原町通りの中央線を肩を組んで放歌高吟して行進したり、傘を銃に見立てて通りかかる車を撃つ真似をしたりしたのも、今にして思えばなつかしい思い出である。

高校勤務を経て、名古屋、岡山と居を移した私は、次第に先生と疎遠になっていった。しかしこの間先生の御令息を高校で担任することがあり、父親としての先生の一面に触れることがあった。「裕が生徒会長に立候補し、当選したのですよ」とお知らせした時の先生のはにかんだような顔は、今だに忘れられない。

何年前だったか、他大学へ転出された由のニュースを聞き、私には相反する二つの思いがあった。もう先生は立命の呪縛から解放されたてもいいはずだ。立命の為に永年御苦勞様でした。新しい職場でいい仕事をしていただきたい。もう先生十分ですよ。の思いと、また一人、立命で頑張ってもらいたい先生が行ってしまったわれたなあ。の思いとであった。

都を遠く離れていても、風の便りで聞く森本先生のニュースは、いつも健康を害されて入院をくり返しておられるといった内容